

# これからの時代を迎えてのライティング指導

— その歴史と現在、そしてこれから —

築地原 尚 美<sup>†</sup>

## A Study on Teaching Writing:

~the past, the present, and the future~

Hisami TSHUICHIBARU

### 要 旨

生徒の英語ライティング能力を育成する試みに伴い、多くの研究者がこの分野を研究している。本論文では、まず学習者のライティングプロセスの歴史に言及する。次に、主に高校で使用されている教科書を参考に、現在のライティング教育について考察する。また、これまでの高校でのライティングの授業を振り返りながら、効果的な指導方法である、ピアレビュー、第一言語、機械翻訳を用いた新たな試みを紹介する。最後に学習指導要領の改訂や時代の潮流ともに高まるL1の能力の重要性を説く。

### Abstract

Many studies have been published on the different methods of improving students' English writing skills. This paper's purpose is to discover the most effective teaching methods, by comparing and contrasting established and modern methods in order to evaluate their effectiveness. Current teaching methods are also reviewed, with reference to the textbooks used in most high schools. Comparing modern and established teaching methods is the best way to discover how to teach English effectively. Newly developed methods such as peer review and machine translation are also introduced. The importance of L1 competence is found by coupling the revision of the Courses of Study with the trends of the times.

キーワード：英語教育、ライティング、母語使用、機械翻訳、高校英語

---

† 教育学研究科 教材開発コース  
英語教育領域  
担当教員：大嶋秀樹

## 1. はじめに

英語の能力は大きく分けて reading、listening、speaking、writing の四つの技能があり、それらをバランスよく伸ばすのが課題とされている。ブリティッシュカウンシルによれば、日本の英語教育は、かつては比較的リーディングに終始しがちであり、ライティングの授業においては、「ライティング」と銘打つだけの文法指導の授業が多かった。そんな中、「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について文部科学省から提言がなされている。(文部科学省, 2002)

経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が 21 世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、このことは、子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている。その一方、現状では、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価が得られないといった事態も生じている。同時に、しっかりした国語力に基づき、自らの意見を表現する能力も十分とは言えない。このため、日本人に対する英語教育を抜本的に改善する目的で、具体的なアクションプランとして『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を作成することとした。あわせて、国語力の涵養も図ることとした(一部抜粋)

また、学習指導要領の改定により「論理・表現」科目が登場し、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーションといった活動も取り入れたライティング教育の必要性が高まっている。筆者は滋賀県の高校英語教諭として 23 年勤務し、ライティング教育の変遷を経験した。特に、文法を中心とした翻訳能力に特化すること困難さを感じた。機械翻訳を使って宿題を仕上げる生徒が現れたからである。この流れを受け、筆者は機械翻訳を用いた指導に興味を持った。本研究では、ライティング教育の歴史と現在の状況、そしてこれからのライティング教育には何が必要とされるかについて探る。

## 2. 理論的背景 ライティングの歴史

### 2.1 アメリカにおけるライティング教育

英語の四技能の中で、ライティングの指導はどのような方法で行われてきたのであろうか。鴨下 (2010) は、言語心理学者の Eric Lenneberg (1967) を取り上げ、子どもの言語習得について、適当な訓練を受けることで初めて上達し、しかも生来の素質に大きな個人差があるものと比べて、言語ははるかに多数の人々が同等の適性を持ち何ら特別の訓練を要することなくはるかに早期に「完成する」能力である、と述べている。しかし、「書く力」は第一言語においてさえも適切な指導をうけ、所属する文化の中で社会化する過程で身につけるものであると考えられる。書き手は各文化特有の修辞学的慣習にのっとり「書く」。その際には思考し、下書きし、推敲するというプロセスを踏むための特別なスキルを身につけなければならない。よって決して自然に発達する能力ではないという。

柏木 (2016) によれば、1960 年代においては構造主義言語学の流れが高まっており、形式主義によるライティング指導が用いられていた。教えられた文法事項を確認する形式である。対照言語学的視点から、日本語と英語のコード変換としての翻訳技術を見る英作文が、入試問題として重宝された。

しかし、米国において 1970 年くらいからプロセスライティングの流れが出てきた。1 つの課題に対して添削と修正を繰り返しながら、英文の構成や文章表現を学ぶ英語学習法のことであるという。書くプロセス (過程) を重視し、英語学習者 (生徒) と講師が協同して文章を作り上げる指導法である。

西口 (2019) によれば、ライティング教育観と教育方法の転換は、認知革命によるライティング教育観の転換によって起こったとされている。知識の伝達を中心とした大学教育のあり方の変容がおり、「学生中心」の教育観が重視されるようになった。米国のライティング教育では、1980 年代に「分析的・分析的」指導から「全体的・総合的」指導へという変化が起こった。

評価の対象は作品から記述過程そのものに移り、教師の役割も仕上がった作品の分析より

も学習者の過程での分析に移ってきた。認知心理学の視点から分析することで、学習者の内的な思考様式を明らかにしようとする動きが活発になってきたのだ。ライティング教育の歴史の変遷の背景には、心理プロセスに焦点を当てる認知心理学の隆盛に伴う、ライティング研究のプロダクト（作品）からプロセス（過程）の分析への移行という経緯がある。米国では、こうした認知心理学の隆盛によ 1970 年代から 1980 年代に、完成したプロダクトを重視する教育観から、文章を書くプロセスを重視する教育観に転換した点が、ライティング教育におけるひとつのパラダイム・シフトであるといえる、と西口（2019）は述べている。

学習者の認知プロセスに着目したプロセス重視のライティング教育では、ライティングを再帰的なプロセスにとらえ、構想を練る（pre-writing）、草稿を作る（drafting）、ピアレビューをする（peerreview）、省察する（reflection）、推敲する（revising）、編集・校正する（editing & proofreading）、といった各ステップをくり返し経験させる指導法である。これらの方略を教えることは、文章表現力の未熟な学生がその力を発達させるのに効果的であるとされる。プロセス・ライティングでは、教員と学生や、学習者間での相互作用に重きが置かれる。ライティング指導を相互作用的なものへと変え、講義からワークショップやカンファレンスになり、またさらに、文章を書くことがプロセスを伴うものと考えられるようになる。つまり、書き手の内的な思考プロセスに注目した研究がおこなわれるようになった。つまり、従来の英文の完成度を問うライティングトレーニングとは異なり、自分の意見を英語で表現する過程を通し、論理的な文章を書けるようにすることが重視される。自分で書いた英文を何度も読み返し、ブラッシュアップしていくことで、英文の論理展開の仕方や単語力、表現力等を総合的に学び、それぞれのスキルを伸ばしていくことができるということである。さらに一方で 80 年代に端を発したコミュニケーション教育の流れを汲むライティングはその後、制作結果よりも過程を重視するようになり、80 年代後半からその焦点を、内容や読み手に移した。そして「プロセスを重

視した」コミュニカティブライティングという考え方が登場する。communicative approach との関わりにおいて、書くプロセスに教師が付き添いその過程において助言（feedback）を繰り返し、共に考え revise に協力するという指導法（process approach）が提唱された。プロセスアプローチ（process approach）では、ブレインストーミング（Brain Storming）、マインドマッピング（Mind Mapping）、或いはスパイダークラム（Spider Gram）を行う。英文を書く前に、関係すると思われる必要情報を箇条書きで思いつくままに書いていくのである。最初に中心にテーマを据えて、順次、放射状に広がる蜘蛛の巣のように、加筆・訂正・削除を繰り返しながら重要な項目とそうでないものに分け、パラグラフの構成順序や重要度を意識しながら、全体構造を作成する予備的な段階の役割を果たす作業である。プロセスアプローチの重要な一部であるピアレビュープロセスや、クリティカルシンキングは、北米の“self”感やインディビジュアルリズムを身につけている子どもには容易い活動であっても、インターディペンデントな社会である日本や中国、台湾出身の学習者には困難な活動であるというものである。クラスメイトの作文を理論的に批判することや、自分自身を表現することが大きな負担になることを指摘した研究が発表されている

## 2.2 認知主義について

第二言語ライティング理論の前に、英語を母語とする学生のライティングのメカニズムを説明した理論として、先ほどの認知主義に基づく Flower & Hayes（1981）のライティング・プロセスモデルがある。（図 1 参照）

このモデルでは、ライティングのプロセスが重視され、書かれたもの自体よりも、書き手が自分の考えをどのように文章としてまとめているかということに焦点が当てられている。Flower & Hayes（1981）が行ってきた研究は主に、「思考発話プロトコル分析（think-aloud protocol analysis）」と呼ばれる手法を用いている。それは、書き手の思考内容を発話させてそれを書き取ったものを分析するという方法である。Flower & Hayes（1981）は、実際には書

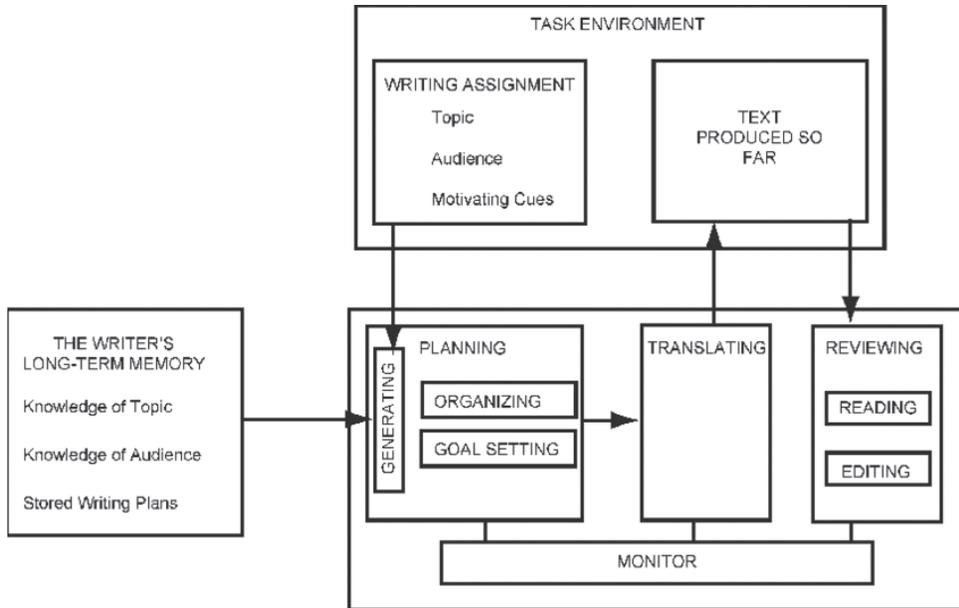


図 1

き手は pre-writing, writing, re-writing というような独立分離した段階を1つずつ進んで行くわけではなく、この3つの段階を行きつ戻りつして作業を進めるのであると主張し、認知プロセスモデルを提示した。彼らのモデルでは、ライティングのプロセスにおいて、次の3つの分野が設定されている。

- (1) 課題環境→修辞的問題・これまで書き上げた文章
- (2) 書き手の長期記憶→トピック、読み手、様々な構想に関する知識
- (3) ライティングの処理過程→構想・文章化・推敲

その後、Hayes (1996) はライティングとは、認知、感情、社会的環境、そして物理的状況が適切にあいまって実現されるものだとし、先の認知プロセスモデルを発展させた形で、包括的な新しいモデルを提案した。

前のモデルと違い、ライティングを社会文化的な文脈の中に位置づけていることが伺える。また、メディアの違いがライティング作業に大きく影響してくることを示唆している。Hayes はこのモデルにおいて、ライティング以外の領

域との統合を示唆している。このモデルから、ライティングという行動は様々な要素によって構成されており、認知的作業であるのみでなく、個人の情動面にも左右され、さらに大きく社会という文脈の中で影響を受けている行為であるということが納得される。

### 2.3 誤り分析とフィードバック

第二言語のライティング研究にとって、「エラー」を分析することによりその典型を把握することができる。そこから、「誤り分析」(error analysis) や「誤りの深刻度」(error gravity) の研究が進んでいった。また、学習者の発話に誤りが多く見られても、それが組織的・体系的である限り、その学習者は自分なりの「言語」を持っている。目標言語とも「母語」とも異なった学習者の言語 (language learner's language) を両者の間に位置するという意味で、言語学者 Selinker は中間言語 (interlanguage) と名付けた。(Selinker, L. 1972) 中間言語は、学習の進展に伴い、たえず変化していて不安定である。その言語社会の中で容認されていない、さらには、意志伝達的手段として恒常的に使われていない、という点で普通の言語の概念とは異なる。

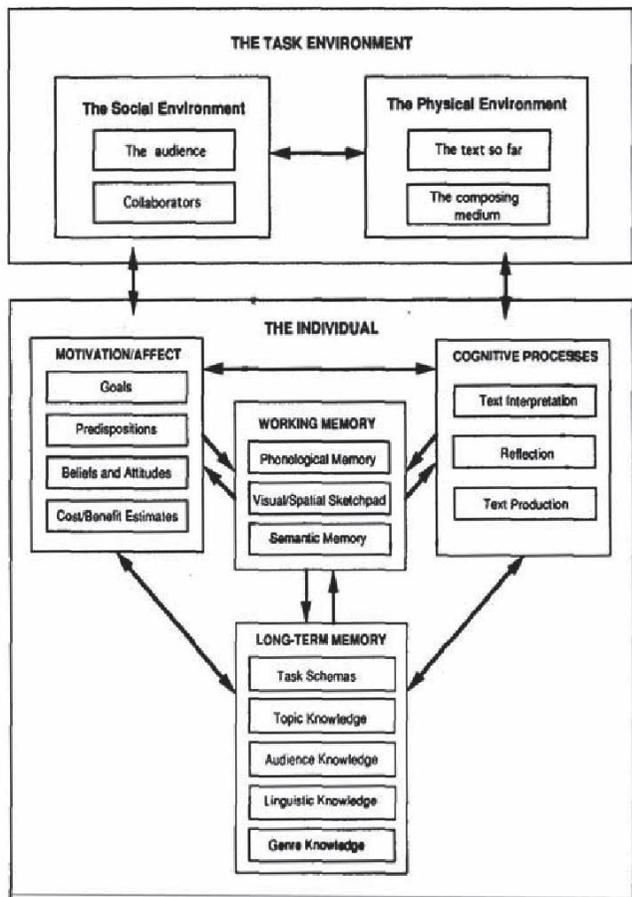


図 2

また、現在のライティング指導では、書き直しのための助言としてのフィードバック (feedback) の役割が重要性を増している。学習者に対するフィードバックには、教師からのフィードバック (teacher feedback) と学習者同士のフィードバック (peer feedback) がある。1980年代の後半から始まったフィードバック研究には大きく分けて2つの側面がある。まず一つ目は、フィードバックを与える側、すなわち教師がどのような誤りをどのように訂正したり、助言を与えるかということである。文法、語彙、スペリングなどの形式面に関わる表層的な誤りへの対処とともに、レトリックや内容の不適切さに関するコメントが大切になってくる。Truscott (1996) は論文の中で、文法面の訂正は役に立たないと主張している。また過度な文法の訂正により、学習者の書く意欲をそぐことにもなることも述べ

ている。それに対して、自分で文法の誤りを直すことができない第二言語学習者の学生にとっては、こうした表層レベルの訂正でも役に立つと述べる学者もいる。さらに作文の質を向上させるには、内容面に関するフィードバックの方が表層的な誤りの指摘より有益であると主張する学者もいる。これらの論争において、どれが正しいのかという結果はまだ検証されていない。また、訂正や助言を学習者自身がどのように活用するか、ということにもスポットが当たっており、学生の作文の質の向上に、より効果を発揮しているのは教師のフィードバックなのか、それとも書き直しという行為なのかという問題は、いまだ解明されていないという。

Fathman & Whalley (1990) と及川・高山 (2000) の両者とも、教師のフィードバック自体より、書き直しという作業の有効性について

報告している。書き直しを必ずさせることにより「気づき」(noticing)が起り、学習内容の内在化がより促進されるのではないかと考えられる。

## 2.4 第二言語におけるライティング教育

ライティング能力の発達過程における母語からの「転移」は主に、統語レベルと修辞(レトリック)レベルの問題として考察されるという。

まず第一に、統語レベルにおいては、日本人学習者が英語を第二言語として学ぶ際には、言語類型上の分類としての「主語—述語(subject-predicate)型」と「主題—コメント(topic-comment)型」の違いがまず問題となってくる。英語は前者であり、そこでの「文」は主語とそれに呼応する述語によって基本的に構成される。日本語は後者であり、話題とそれに応えるコメントにより文が成立しているとされる。

次に、修辞(レトリック)レベルにおいては、対照修辞学がキーワードとなってくるという。対照修辞学によると、言語により考えをまとめそれを表現する際、そこには必然的にその言語が内包文化的思考様式が反映されるという。さらにこうした文化的思考様式は学習者が第二言語によって文章を書く時にも転移として現れがちであるという。さらに母語と第二言語においては、補完関係があることもわかっている。第二言語ライティングは、不自由な目標言語を使って様々な情報処理をしなければならないので、認知力に大きな負荷がかかる作業である。その負荷を少しでも軽減するために、母語が積極的に利用(正の転移)されているとも考えられる。Kobayashi & Rinnert (1992) 及び辻 (2020) の研究では、英語力が低い学生は、日本語から英語へ翻訳することで内容とスタイルにおいてより質の高い作文を書くことができたとして、母語が補完的に働く場合を示している。第二言語ライティング能力にはライティング自体の経験やライティングに対する自信が関与していることが示され、さらには母語であるとか、第二言語であるとかに左右されない普遍的な作文能力の存在が示唆されている。

Bereiter & Scardemalia (1987) のモデルは母語において、全ての書き手のライティングのプロ

セスが一様な形を取るわけではないと主張し、「知識伝達モデル」(knowledge-telling)と「知識変形モデル」(knowledge-transforming)という2つのタイプのプロセスを提唱した。未熟な書き手は自分の頭の中で思いついた内容を即座に文字化して作文し、その際、綴りや文法などの形式面にしか注意を払わないのに対し、熟達した書き手は自分の書いている文章に対して、常に自問自答と問題解決を行い、内容が豊かで説得力ある文章にすべく継続的、複線的に関わっていく、という。第二言語においては、Sasaki (2000) の中で次のように述べられている。まず第一に、熟練した書き手は、書き始める前の構想の段階で、十分時間をかけて文章の構成を練り、書き始めたらあまり止まらずに書くのに対し、初心者は人まよりの内容が終わるたびに書くのをやめ、熟考する。また第二言語の能力の違いがストラテジーの違いになっていると述べている。つまり、初心者は日本語で考えた考えを英語に直すのに、よく立ち止まってしまうが、熟練した書き手の場合は、自分が伝えたい内容を表すのに、より良い表現の英語を探すために立ち止まる。この実験の結論は、第二外国語のライティングである限りは、第二外国語の熟達度、つまり英語力がライティング・ストラテジーに深くかかわっていることを示している。

Raimes (1983) は書き手が意識せねばならないことについて挙げ、Ellis (1994) は「優れた学習者」の特色について触れている。これらのモデルや研究結果から考察すると、優れた書き手が用いるストラテジーは次のようになる。つまり、まず第一に、書こうとする作文のジャンル、トピック、読み手を意識する。第二に、実際に書く作業が始まる前に、構想を練り、書く内容の目標を設定する。第三に、書きながら常に形式(綴り、文法)及び内容や表現、さらに文章全体の構成に関しモニター(注目と考察)を怠らない。第四にライティングの過程において、「自分の言いたい内容をどう表現すべきか」、「これは読み手を説得できるものか」など、自分への問いかけをしながら書き進める。第五に、書き上がったものへの推敲と書き直しを繰り返し行う、ということである。

さらに、教室内のライティング指導の効果

(Pienemann, 1984) は、「教授可能性仮説」(the Teachability Hypothesis) について触れ、次のように書いている。「学習者は発達段階においてちょうどその準備がなされている時にのみ、教えられることを学ぶ」と。そうすると、ライティングのフィードバックにおける「誤りの訂正」(error correction) の時期と範囲の適切さが問われてくる。また、教室内での明示的学習、すなわち文法などの学習はそれほどライティング力の向上にはつながらず、暗示的学習につながるような機能面での指導(読み手を意識すること、目的意識をもつことなどのストラテジーを教えること)の方が効果的であるという意見もある。

## 2.5 コンピュータを用いたライティング教育

Computer-assisted Language Learning (CALL) の登場により作文の量的分析が瞬時にできるようになったこと。ネットワークで学生たちがつながることができるようになったことにより、共同学習(collaborative learning)が促進されると考えられる。つまり、Eメール交換などのコンピュータ通信においては、真の読み手、真の目的が存在するわけであるから、コミュニケーション重視のライティング活動がごく普通に行えるようになった。さらに、コーパス言語学のライティング研究への応用がある。コーパス言語学の発達のおかげで、大量の作文データをコンピュータの中に取り込み、その中から研究の目的にかなった項目を拾い出してデータ化するという作業が短時間で可能になってきた。今後こうしたコーパスを活用することにより、たとえば大量のデータから日本人学習者に典型的なエラーを抽出し、それに注目したライティング用 CALL 教材などを作成するなど、この分野の発展の可能性は大きい。また最近では機械翻訳を使った授業の試みも出てきており、興味深い。(森・ジョンストン・佐竹, 2016)

## 3. 調査 現行のライティング教材を分析する

### 3.1 調査の目的

ライティングの歴史については前章で触れたが、現行のライティング教育はどうなってい

るのか。その実態を確かめるために、ライティング教育の中で多く用いられているテキスト、参考書、及び高校卒業後の生徒が受験する可能性の高いライティング能力テスト等検定試験の内容を調査した。注目すべき点として、今回の学習指導要領の改定の前後での、発行される教科書の内容の違いに注目した。大学生用のライティング参考書、及び検定試験についても、ライティングにおいて問われる能力を調査した。

### 3.2 調査対象の書籍・検定試験

- ・文部科学省検定教科書の中で滋賀県内の「ライティング」の授業で多く用いられている「英語表現」の教科書、及び「コミュニケーション英語」の教科書
- ・amazonの2015年から2020年間のベストセラーランキングに入っているライティングの参考書
- ・TOEFLライティングテスト、英検ライティング試験
- ・英語教師用参考図書
- ・大学用ライティング参考書

### 3.3 方法

文部科学省検定教科書については、滋賀大学図書館の蔵書本を用いて一冊ずつ調査した。

文法項目や、扱われているストラテジー、理論、ライティング活動についてチェックした。

ライティング参考書も同様に内容観点別に調査し、前章のライティングの歴史の中のライティング理論の項目の有無を調査した。検定試験については、ホームページ等をチェックして、採点方法課題を調べ、ライティングの中の点数化を調査した。

### 3.4 仮説

学習指導要領の改定によって内容に変化が出ているのではなかろうか。

現役高校教師としての観測だが、現場の実態と教科書が掲げている理想がかけ離れている場合もあるため、表面的には新しいライティング教育の流れが取り入れられている場合もあるのではないかと予測した。また教材に関しても、プロセスライティングの流れを汲んだものも見受

けられると考えた。

### 3.5 結果と考察

学習指導要領改定前の教科書においては、1960年代からの構造主義に基づき、形式からスタイルを重視したライティング活動の流れを受け、細かな文法事項に基づいたレッスン構成がなされている。パターンをマスターし、その上でさまざまな内容、語彙を用いたバリエーションの英作文を仕上げる内容が多く見受けられた。大学入試においても、文法知識を問う問題が多く出されていた為、自分の考えや、メッセージを伝えるというよりは、与えられた日本語を翻訳する力が求められていた。学習指導要領の改訂や文科省の通達を受け、翻訳をする力よりは、自らのことを表現する力、メッセージを発信する「発信力」が求められてきている。また、四技能の一つである、ライティングという科目においても、「やり取り」と「論理・表現」に分けられた四技能五領域を伸ばすことが肝要とされており、それに伴って、文部科学省検定教科書の内容も変わってきた。旧課程においても、パラグラフライティングを書くというコーナーは設けられている教科書もあったが、新課程の教科書において、マインドマッピングや、ブレインストーミング、またライティング活動の中でプレゼンテーションの下書きを行なって実際に発表したり、ディスカッションをしたり、またディベートをすると言った活動も教科書の中で紹介されるようになってきた。実際にライティングの指導の歴史の中で触れられていた構造主義から認知主義の流れを受け継ぎ、プロセスライティングやコミュニケーションライティングの流れが高校の英語ライティング指導にも生かされてきつつあると言えよう。個々人が本人の感情、感覚をどれだけ表現できるかが、正確な文章を書くことよりも優先され、書きたい内容あるいは伝えたいメッセージに集中し、自らの発意によって書くことが学習の中心に置かれてきた、と言えよう。またコミュニケーション英語の教科書においても、読み方の指導だけでなく、文の繋がりやパラグラフの構成について詳しく学習する内容が新課程において多く取り入れられている。また要約文を作成し、ディス

カッションをするなど、アウトプットすることを踏まえてのリーディング指導が取り入れられている。またCEFRについて触れられている教科書も出てきており、国際社会の中で期待されている高校英語教育の流れを汲む内容になってきている。

ライティング試験については、TOEFLの場合、アカデミックな環境で英語で書く能力を測定するように設計されており、明確で整理された方法でアイデアを提示できるかが問われている。

英検の場合は、自分の意見とその理由を明確にし、多様な観点から考えて意見を支える論拠や説明をすることが推奨されている。やはり自らの意見を、発信力を持って伝えることのできる力が求められていると言えよう。

## 4. これからのライティング指導

### 4.1 協同推敲（ピアフィードバック）

Ferris & Hedgcock (1998) は、ピアフィードバック活動を支える理論的基盤として、プロセス・ライティングとの相性の良さ、協同的な学習の重要性、第二言語習得における相互交流の重要性を挙げ、この活動の利点を先行研究をもとに以下の8点に集約している。

- (1) 生徒が自らの学習に主体的にかかわること。
- (2) 生徒がペアのからの反応に刺激され、自らの考えを再構築すること。
- (3) 生徒がクラスの前や教師と会話するときよりも、緊張感が少なく、その場に合った探求的な会話ができること。
- (4) 生徒が現実の読み手から質問や反応を受けられること。
- (5) 生徒がさまざまな相手から反応を得られること。
- (6) 生徒が何をうまく書いて何をうまく書けなかったかについてフィードバックを得ることにより、読み手が何を求めるのが認識できること。
- (7) 生徒がペアの作文を読むことにより、自らの作文を推敲する際にも必要な批判的な目を養えること。

- (8) 生徒がペアの作文の長所・短所を見ることで不安を軽減し自信をつけられること、である。

ピアフィードバック活動は英語母語話者に対する母国語での作文指導においてその有効性が調査されていたが、1990年代に入り、第二言語作文指導の手法としてもその効果が検証されるようになった。これらの研究はその調査課題や手法から、学習者がどの程度ピアフィードバックを作文に反映させたかを調査した次の四つの研究に分類されるという。(久山, 2008)

- (1) 教師からのフィードバックと学習者からのフィードバックを比較した研究
- (2) PF活動における発話を記述し、その特徴を分析した、あるいは書き直しに反映された度合いを調べた研究
- (3) 学習者に効果的なPF活動を行うための指導を行い、こうしてその効果を検証した研究

である。

#### 4.2 コンピュータを用いた教育 機械翻訳

機械翻訳を用いた授業実践はまだまだ少ないのが現実である。そんな中、高等専門学校での実践を発見した。森・ジョンストン・佐竹(2016)である。和文英訳が中心の大学入試問題を受けることになる普通科の高校生にとっては、機械翻訳を用いた英語授業は、弊害があるかもしれないと森は述べている。しかし、森の携わる学校は高等専門学校のため、大学入試はまず受験しない。森の研究で特に興味深かったのは、まず第一に、機械翻訳にかけるために、日本語を直すことである。機械が翻訳しにくい日本語のままでは、誤訳の産出につながるからである。第二章で中間言語について触れたが、「やさしい日本語」の英作文産出における可能性を樋口(2021)は述べている。

第二に、出来上がった英語をまずピアフィードバックするということである。ピアレビュー、ピアフィードバックについては、本研究においても多数紹介してきた。日本語を直すこと、そしてピアフィードバックすること、こ

の二つの作業を地道に積み重ねることにより、森の学校の生徒は、GTECでのライティングスコアの向上を見ることができたという。この2点は、筆者に足りなかった着眼点であり、非常に興味深い点であるので、今後の大学における実践的教育の参考にしたいと考える。

#### 4.3 母語使用

辻(2020)は、国内外の母語使用に関する先行研究を通じ、外国語教育における母語使用の有効性について次の三点について調べた。

- (1) 母語使用の利益を享受する学習者の外国語レベル
- (2) 母語使用が効果的なライティング・タスク
- (3) 母語使用を促すべき用途

その結果、全レベルの学習者に母語使用の意義があること、学習者に馴染みの低いタスクの達成に母語使用が寄与すること、学習者の外国語レベルにより母語使用の用途が異なることが示された。特に今回研究対象となった初級・中級英語学習者には、認知負荷がかかるタスクにおいて、英語テキスト上の包括的要素(文章の構成・内容等)と局所的箇所(各センテンスの可読性)の発展を志向した「母語使用」が有益であることが示唆された。また認知的プロセスを解明するため、ライティングプロセスに焦点を当て、各プロセスにおける母語使用の教育的効果を調査した。その結果、書く内容を計画する活動(「計画」)から英語に文章化する活動(「英語による文章化」)への移行に認知負荷がかかることが明らかとなり、両プロセスをより円滑に繋げる認知的プロセス、即ち、母語による文章化の必要性が示唆された、という。

## 5. 終わりに

ライティング指導にとって大切なことは何か。それは生徒に自らのことを振り替えさせ、伝えたいメッセージを持って誰かに何かを伝える能力、詰まるところ、言葉の力、母国語の力を養わせることにもつながると言えよう。(文化庁国語課題小委, 2018)

前章で挙げた文部科学省の通達に加え、「今後の英語教育の改善・充実方策について」文部科学省（2014）を引用したい：

社会の急速なグローバル化の進展の中で、英語力の一層の充実は我が国にとって極めて重要な問題。これからは、国民一人一人にとって、異文化理解や異文化コミュニケーションはますます重要になる。その際に、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって不可欠であり、アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきである。今後の英語教育改革において、その基礎的・基本的な知識・技能とそれらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することは、児童生徒の将来的な可能性の広がりのために欠かせない。もちろん、社会のグローバル化の進展への対応は、英語さえ習得すればよいということではない。我が国の歴史・文化等の教養とともに、思考力・判断力・表現力等を備えることにより、情報や考えなどを積極的に発信し、相手とのコミュニケーションができなければならない。（一部抜粋）

英語の教員は、生徒たちが英語をうまく運用できるようになり、国際的な幅広い視野を身につけることをサポートできるに違いない。そして国際的な発信力を生徒に身につけさせることが期待できる。また新学習指導要領で新しく創設された「論理・表現」のカリキュラムの中でも同様のことが謳われている。その中で「論理・表現Ⅲ」を抜粋する。文部科学省（2018）：

本科目では特に、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート、複数の段落から成る文章を書くことなどを通して、聞き手や読み手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合うことなどができるようになることを目標としている。（一部抜粋）

新しい学習指導要領の内容を達成するため

には、従来のような文法重視の授業では到達するのは難しいと思われる。よって新たなライティング指導の試みが必要となってくる。例えば、ピアフィードバックや、機械翻訳、母語を活用した作文活動などが有効になると言えよう。新しい文部科学省検定教科書には、ディベートやプレゼンテーションを活用した授業の内容も紹介されているが、まだまだ十分であるとは言えない。またそれを実際に運用していく学校側の体制を整えるため、英語教師の英語の教科指導に対する更なる研鑽、また研修の機会の確保が必要となってくる。そうした今後の新しい変化も取り入れたライティング指導のこれからの期待したい。

#### 参考文献

- Andrew Domondon 吉岡友治（2014）『TOEFL テストライティングの方法 アカデミックライティングの基本と応用』実務教育出版
- ベネッセコーポレーション（2020）『GTEC スキルUP ワーク』ベネッセコーポレーション
- ブリティッシュカウンシルホームページ 英語教育に関する最新情報 英語四技能とは  
<https://www.britishcouncil.jp/programmes/englisheducation/updates/4skills/about>  
 最終閲覧日 2021 年 12 月 18 日
- 文英堂（2014）『Unicorn English COMMUNICATION Ⅲ』文英堂
- 文英堂（2014）『Unicorn English EXPRESSION I』文英堂
- 文化庁（2018）「分かり合うための言語コミュニケーション（仮）」[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo\\_kadai/iinkai\\_16/pdf/r1399290\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo_kadai/iinkai_16/pdf/r1399290_01.pdf) 最終閲覧日：2021 年 12 月 13 日
- 早川幸治（2015）『TOEFL テスト ライティング問題 100』旺文社
- 樋口晶子（2021）「英作文における中間言語としての〈やさしい日本語〉の適切性と『英語初級シラバス』試作」四日市大学論集 34（1），1-2 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyu/34/1/34\\_1/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyu/34/1/34_1/_article/-char/ja/) 最終閲覧日：2022 年 2 月 16 日
- 久山慎也（2008）「高校生の自由英作文指導におけるピア・フィードバックの活用—プロセスの改善とライティング不安の軽減の視点から—」公益財団法人日本英語検定協会 英語教育研究センター「英検」研究助成報告 実践部門Ⅳ 英語

- 能力向上を目指す教育実践 [https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/list\\_1X/20/](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/list_1X/20/) 最終閲覧日：2021年11月16日
- いわずな書店 (2018) 「English EXPRESSION II」いわずな書店  
 ジャパンタイムズ & ログポート編 (2017) 『英検準1級 完全制覇』 ジャパンタイムズ社
- 門田修平 (2014) 『増補改訂版 決定版 英語エッセイライティング』 実務教育出版
- 鴨下恵子 (2010) 「ビギナーレベルの大学生に対するライティング指導の試み」『東京工芸大学工学部紀要』 Vol. 33 No.2 55-61
- 柏木哲也 (2016) 「ライティング指導の方法と評価」『基盤教育センター紀要 = Bulletin』 (27), 19-34 北九州市立大学基盤教育センター
- 厚生労働省 (2021) 「令和2年10月末現在の外国人雇用についての届出状況」  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/koyou/gaikokujin/gaikokujin-koyou/06.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/gaikokujin/gaikokujin-koyou/06.html) 最終閲覧日 2021年11月16日
- 啓林館 (2017) 「Vision Quest English EXPRESSION II Ace」 啓林館
- 啓林館 (2018) 『Revised Element English COMMUNICATION III』 啓林館
- 文部科学省 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm)  
 最終閲覧日 2021年12月18日
- 文部科学省 (2018) 『平成30年度告示高等学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2002) 「平成14年『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm)  
 最終閲覧日：2021年11月16日
- 森・ジョンストン・佐竹 (2016) 「機械翻訳を利用した英文ライティング指導方法に関する研究」四国英語教育学会『紀要』第36号
- 中谷安男 (2020) 『大学生のためのアカデミック英文ライティング』大修館書店
- 西口啓太 (2019) 米国大学におけるライティング教育の歴史の変遷：1860年代から1980年代までの学習支援体制の視点から 教育科学論集, 22巻 pp. 1-11
- 及川賢, 高山芳樹 (2000) 「自由英作文指導における error feedback と revision の効果」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』14巻 pp. 43-54
- 三省堂 (2014) 『Crown English COMMUNICATION III』三省堂
- 三省堂 (2017) 『Crown English EXPRESSION1』三省堂
- 三省堂 (2018) 『MY WAY English EXPRESSION II』三省堂
- 数研出版 (2014) 『Big Dipper English COMMUNICATION III』数研出版
- 数研出版 (2018) 『Big Dipper English EXPRESSION II Ace』
- 竹野茂 (2007) 「研究ノート：高等学校における英作文指導の実態とその改善点」『宮崎公立大学人文学部紀要』第1号 pp. 309-322
- 田中信之 (2011) 「日本語教育におけるピア・レスポンスの研究：有効性と自律性の観点から」金沢大学大学院人間社会環境研究科博士論文
- 辻香代 (2020) 「母語使用を取り入れた外国語ライティング教育に関する研究」京都大学大学院教育学研究科博士論文
- 上山晋平 (2020) 『つまり3段階を見抜けば生徒は劇的に変わる！』学陽書房
- 増進堂 (2018) 『MAIN STREAM English EXPRESSION II』増進堂
- Appel, G., and Lantolf, J. (1994). *Vygostkian approaches to second language research*. 33-56. Ablex
- Bereiter, C. and Scardamalia, M. (1987). *The psychology of written composition*. Loutledge.
- Donato, R. (1994). Collective scaffolding in second language learning. In J. P. Lantolf, & G. Appel (Eds.), *Vygostkian approaches to second language research* 33-56. Ablex.
- Ellis, R. (1994). A theory of instructed second language acquisition. In N. Ellis (Ed.), *Implicit and explicit learning of languages*. Academic Press.
- Eric, H, Lenneberg (1967). *The Biological Foundations of Language*. John Wiley and Sons.
- Fathman, A. K., and Whalley, E. (1990). Teacher Response to Student Writing: Focus on Form versus Content. In B. Kroll (Ed.), *Second Language Writing: Research Insights for the Classroom* (pp. 178-190). Cambridge: Cambridge University Press.
- Ferris, D.R and Hedgcock, J. (1998). Teaching ESL Composition: Purpose, Process, and Practice. *English for Specific Purposes*, 20, 1
- Ferris, D. R. (1999). The case for grammar correction in L2 writing classes. A response to Truscott (1996). *The Journal of Second Language Writing*, 8, 1, 1-11
- Ferris, D. R. (2011). *Treatment of error in second language student writing* (2nd ed.). University of

- Michigan Press.
- Flower, L. and Hayes, J.R.(1981). A Cognitive Process Theory of Writing. *College Composition and Communication*, 32, 365-387. <http://dx.doi.org/10.2307/356600>
- Hayes, J. R.(1996). A New Framework for Understanding Cognition and Affect in Writing. In C. M. Levy, & S. Ransdell (Eds.), *The Science of Writing: Theories, Methods, Individual Differences and Applications*. 1-27. Erlbaum.
- Kobayashi, H. and Rinnert, C(1992). Effects of First Language on Second Language Writing: Translation versus Direct Composition. *Language Learning*, 42 (3),183-209 In Byrnes H.(Ed.), *Advanced Language Learning: The Contribution of Halliday and Vygotsky*, 95-108. Continuum.
- Kepler,C.G.(1991). An experiment in the relationship of types of written feedback to the development of second language writing skills. *Modern Language Journal*, 75(3), 305-313
- Pienemann, M.(1984). Psychological Constraints on the Teachability of Languages. *Studies in Second Language Acquisition*, 6(2),186 -214
- Raimes, A.(1983). *Techniques in Teaching Writing*. Oxford University Press.
- Sasaki, M (2000). Toward an Empirical Model of EFL Writing Processes. *An Exploratory Study Journal of Second Language Writing*, 9(3), 259-291
- Selinker, L.(1972). Interlanguage. Product Information International Review of Applied Linguistic in Language Teaching, 10, 209-241<http://dx.doi.org/10.1515/iral.1972.10.1-4.209>
- Brown, S. Larson-Hall, J.(2012) *Second Language Acquisition Myth*. Michigan Press
- Swain M.(2006). Languaging, Agency and Collaboration in Advanced Second Language Proficiency. In: Byrnes, H.,(Ed.), *Advanced Language Learning. The Contribution of Halliday and Vygotsky*, Continuum,95-10
- Truscott, J.(1996) The Case against Grammar Correction in L2 Writing Classes. *Language Learning*, 46, 327-369. <http://dx.doi.org/10.1111/j.1467-1770.1996.tb01238>.